

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成25年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	免疫システム調節治療学 推進リーダー養成プログラム	申請大学名	千葉大学
申請大学長名	齋藤 康		
プログラム責任者	徳久 剛史		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体のプログラムの推進としては、学内委員会の具体的な役割をのぞいて管理運営体制がよく整備され、概ね順調に進んでいる。 ・良い学生が妥当な方法で選抜されている。 ・学生はアクティビティが高く、ポテンシャルのある者が多い。 ・このような学生に本プログラムの理念を周知し、世界にはどのような職があるかを教えることにより、学生にオプションを与えて欲しい。 ・指導体制は、内部・外部の3名の教員で実施され、学位認定も英語で実施されるなど、良く配慮されている。 ・学生からは、「専門の研究に関する事項よりもリーディングプログラムが優先されるのでやりやすい」、「医学系では他の研究室をみる機会はほとんど無いが、本プログラムを通じて他の研究室をみるができる。将来の自らの研究に役に立ちそうである」、「いろいろな人とのパイプができる」などのポジティブな感想があった。 <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当日、意見交換を行った学生は皆研究者志向であった。教員側の意識が学生に反映している面もある。グローバルリーダーを養成するという教員側の熱意を学生に伝えていただきたい。 ・本プログラム実施に際して懸念すべきは、キャリアパスとして医師ではなく他の道に進むグローバルリーダーを何人作り出すことができるかという点であり、教授陣の強い意志が必要である。 ・「治療学」という実践的な学問を修めるにはカリキュラムに臨床実習が必要ではないか。 ・現在は、講義等に英語を使用する割合が、30-40%との声もあり、改善が求められる。 ・学生がキャリアパスを形成するに当たって必要となる情報についての提供が少ないと感じた。WHOやNIH等の具体的な情報を学生に提供すべきである。 ・採択時の留意事項にもあるアレルギーの治療の教育プログラムについての計画変更が見えなかった。今後裾野を広げる必要がある。 ・プログラムの各学内委員会について具体的な内容を詰めていただきたい。 ・学生に対して過保護になるのではなく、世界の最前線に送り出していきたい。 ・学生には日本の大使として世界に出て行ってもらいたい。 ・特任教員のプログラムへの関与の仕方についても今後注視してゆきたい。 			